

国際バラとガーデニングショウ  
ガーデニング部門大賞受賞

清水 守也 さん  
清水きよみ さん

庭造りにかける情熱！

西武ドームで毎年5月に開催される『国際バラとガーデニングショウ』のガーデニング部門に、連続8回入選し、9回目の今年、大賞（国土交通大臣賞）を受賞したのが毛呂山町在住の清水さん夫妻だ。

元々、建築業を営んでいた清水さんだが、自宅を建てた際、木や花によって家の印象が変わることに驚き、庭造りに取り組むようになった。

ショウに出す庭のアイディアは夫婦2人で出しあう。1つの庭を作るのに、30以上の案を出すという。意見が対立することもしばしばで「夫婦喧嘩になることも」と笑う。夫婦だからこそ遠慮がない。妥協のないぶつかり合いの結果、2人が納得した作品は、最初のものより、より深いテーマ性のある作品へ変化していくという。

ショウが終わると、すぐ次のショウのアイディアを練り始める。「大変ですが、ショウの庭は自分たちの庭がこうだったらという夢の形。どんな希望もわがままも入れられて楽しい」という。国内最大規模のショウで発表できるということもやりのひとつだ。



受賞作品と清水さん夫妻

ただしショウに出るのは容易ではない。150点を越す応募作品のなかから、出展できるのは入賞した12点のみ。狭き門をくぐり抜け、毎年出展している清水さんだが、大賞に選ばれることはまったく予想していなかったという。大賞受賞者には、授賞式の当日に連絡が入るようになってくるが、「その日もいつものように、庭の手入れをしようというポーズでショウの会場に向かっていました。その途中で受賞の連絡が入ったんです。車のなかで皆が大きな拍手をして、思わず涙ぐみました。でも、おかげで授賞式にはジーンズで出るようになってしまいました」そんな清水さんの庭テーマは、今もこれからも「人がいる庭」。その人のライフスタイルに合わせて、使ってもらえる庭造りを目指している。人がいるからこそ、庭に命が吹き込まれると清水さんはいふ。アイディアがたくさんつまった身近な庭が、これからも清水さんによって次々と作られていくことだろう。

毛呂山歴史教本

文化財シリーズ197  
毛呂山の昔話 2

～オーサキ～

毛呂山に古くから住む人に「オーサキ」の話を聞いて驚いたことがあります。その姿は話す人によってまちまちで、狐といったちの間、眼が縦になったリスみたいなもので集団で行動する、山犬みたいなもの、尾が何本にも裂けた狐などと伝えられています。町内の古老にうかがったオーサキの話をご紹介します。

おひつの縁を叩くと・・・

①子供のころ、釜やおひつの縁をしゃもじで叩くとオーサキが来るといって怒られた。オーサキはその家のためにお金、繭、米、麦、衣類など、何でも運び込むという。飼われていた家に飽きると新しい家に移るといわれていた。

②子供のころ、悪いことをすると親から「オーサキにさらわれるぞ」と言っただら、油揚げや魚をあげないと家のお金や蚕をくわえて出て行ってしまおうというので、母が縁の下に油揚げを放り込んでいた。

オーサキと財産

①オーサキは飼い主に忠実な動物で、隣の畑の人が自分の主人の畑に石を一つ投げたところ、一晩のうちに主人の畑の石を全て隣の畑に投げ返したという。

②オーサキには貧乏オーサキと大尽オーサキがいて、繭を一晚のうちに貧乏オーサキから大尽オーサキのいる家に運ばれてしまうことがあった。そのため貧乏オーサキはますます貧乏になり、大尽オーサキはますます大尽になるといふ。オーサキは油揚げが好物で、大尽オーサキのいる家は常に餌の油揚げを用意していた。おひつの縁を叩くとオーサキが寄り集まるので固く戒められていた。

オーサキは「尾裂き」ともいって関東近県で広く語り継がれた憑き物です。主人に忠実で家に住み着くと富をもたらずにもかかわらず、憑き物として敬遠された少し不憫な存在です。昔は急激に財産が増えたり減ったりすると、オーサキの仕業とささやかれたのでしょうか。今は忘れられたオーサキですが、飯能市長沢にはオーサキが山番をするオーサキ岩の伝説が残っています。オーサキが今もひっそりと生きているかもしれません。

出典『毛呂山民俗誌1』  
毛呂山町教育委員会